

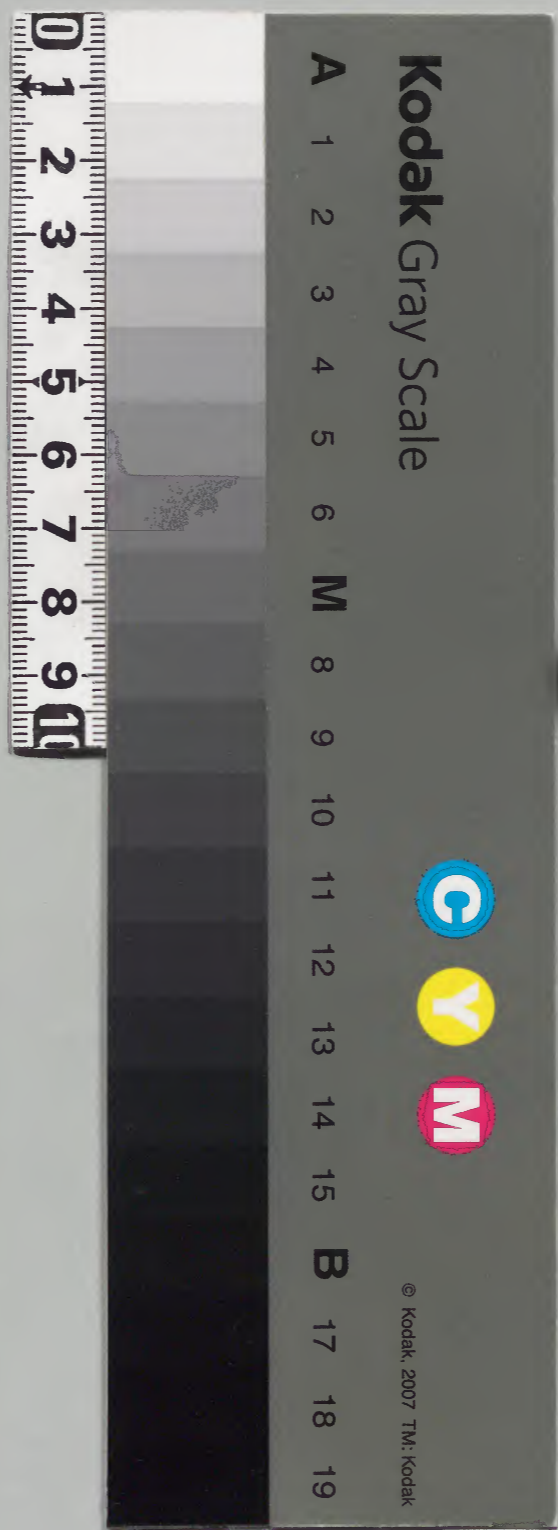
日本書紀傳 三十卷

和 一〇五二二號

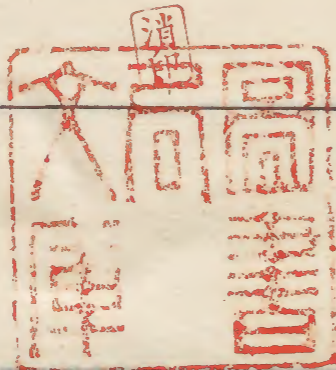
百十

内閣文庫	
番號	和 10522
冊數	156 (119)
函號	85 1

内一三六八三號



教部省
文庫印



二下ノ幸魂此ニ依テ
多ク御と注ミテ
和名ハ幸魂日本
言ハ幸魂和名佐
岐天太草由俗云佐
岐太草由有リ



皇孫御紀ノ誰神也願欲知其名と書されたり如
く此ノト必有以可キ御事あり

天孫降臨章第一
一書ハ猿田彦神
ノ出迎給へり所ハ所幸道路有如此居之者誰也云々
神武天皇御紀ハ天皇招之因問曰汝誰也對曰臣是國
略リたりハ此ヨリ劣状あり云々
吾是汝之幸魂
奇魂也ハ上る對曰を下へ廻して吾者汝之幸魂奇
魂尔坐理登答給比伎と訓べハ汝之ハ汝ハ大造の功
績を助成し給ふと云義ハ見べきあり幸魂ハ和記ノ

幸魂是左支久阿良之无留魂也ヤキトモ行矣者久遠之義也
 有以也予甘るいす言の如く佐枳弥多摩うて佐枳
 ハ佐知トヨチト同トクトヨチトて天神の賦與コトヨリト給ふ事業シゴトト云ふ
 少其蓋ハ海官遊行章ト兄火闌降命自有海幸幸此云
 弟彦火ト出見尊自有山幸始兄弟二人相謂ト試欲易
 幸遂相易之各不得ソノサヘナラ其利リ兄悔之乃還身弓箭而乞已釣
 釣下略其弟ト一書ト兄火所若命能得海幸弟彦火火出
 見尊能得山幸時兄弟欲互易其幸故兄持弟之幸弓入
 山覓獸終不見獸之乾迹弟持兄之幸釣入海釣魚殊固
 無所獲遂失其釣下略又古事記トも故火照命者爲海佐

知昆古而取鱒廣物鱒狹物火遠理命者爲山佐知昆古
 而取毛鹿物毛柔物尔火遠理命謂其兄火照命各相易
 佐知欲用三度雖乞不許然遂續得相易尔火遠理命以
 海佐知釣魚都不得一魚亦其釣失海於是其兄火照命
 乞其釣曰山佐知母己之佐知ト海佐知母己之佐知
 ト今各謂返佐知之時下略ト有る此文を先説て後ト
 其意を得べきあり傳の異同ト有るトも取終て云時
 ハ右ト自有海幸自有山幸ト有る自ハ直指ト謂天然
 生得ト云り幸ハ纂疏ト猶利也ト注され給へる如く
 ト其稟賦ト依て妙る利用有る云あり誠欲易幸

遂相易之各不得其利ハ云ハ各其性ハ得たる事ハ非
るハ故ハ互ハ其利ハ失いて大なる福の基を爲たる
由多り幸弓幸鈎ハ其性ハ合いてカむる事業ハ器
物ハ各其用を利して其幸有を以て云ハ杯あり若
ゆて能得海幸能得山幸ハ云ハ其性ハ得たる事ハ學
ばずして能覺り性ハ得ざる事ハ日夜習鍊すと雖も
其功を難成くして其性ハ得たる事ハ自然ハ其道ハ
好む性ハ得ざる事ハ多々ハ好まざる者あり右の山
幸海幸の事ハ自有と云ハ能得と有よ心を著て其義
を曉る可くあるは有けり偕其幸を自然ハ能得しめ給

偏此法如事傳
三十卷三十九下より
見合可

ふ者有り其即此ハ謂ゆる幸魂是多り其説ハ次ハ云
べし記傳十七卷三下ハ佐知ハ幸取ハて伎を省き登
り吉き事を云ふ福字をも書し此ハ海ハて諸魚
を得を海佐伎ハ云ハ山ハて諸獸を得を山佐伎ハ云
ふ凡て物を得ハ身の爲ハ吉事あり故ハ幸ハ云あり
云くと云れたれども幸字の義と見て有ぬ可ハ幸取
を切めて佐知と云と奇魂此云俱斯美抱磨ハ幸魂と
ハ余ハ整ハたりハ御靈の謂ハて別ハ一有ハハ
して實ハ奇ハく抄ハ御靈の謂ハて別ハ一有ハハ
非ず万葉五ハ鎮懐石歌ハ可既麻久波阿夜尔可斯
故斯多良志比咩可尾能弥許等可良久尔遠武氣多比
良宜ハ弥許ハ昌遠斯亘速多麻布等伊刀良斯互伊波
比多麻比斯麻多麻奈須布多都能伊斯乎世人尔斯咩

斯多麻比豆余呂豆余尔伊比都具可祢等和多能曾許
意枳都布可延乃宇奈可美乃故布乃波良尔美豆豆可
良意可志多麻比豆可武奈何良可武佐備伊麻須久志
美多麻伊麻能遠都豆尔多布刀伎呂可儻之有久志
美多麻比此比之奇魂比と同卜事多り但上之伊刀良斯豆
伊波比多麻比斯麻多麻奈須布多都能伊斯字之有る
其如真玉二石を指て奇御玉之祢奉りて玉作神
を擲明玉神之祢申せりか如く多り物其神靈を指てり此の奇魂
の義より取成し奉り者多り其ハ下小美豆豆可良意
可志多麻比豆ハ御手自置給而多り其奇魂を幸

給ふ皇后の御方ハ附て申せり多り可武奈何良可武
佐備伊麻須ハ其玉ハ託させ給へり神靈ノ惟神ハ
一神ハ御在し坐を云ふ其を此ハ取て説を成すハ
大己貴神を右の二石ハ譬ふ可し御手自云ハ其神
靈ハ託給へり皇祖天神の御事ハ取べし惟神神進在
すハ其國上土を經營給ふ幸魂を賦與して神トモ神ト
惟神ハ神進御在し坐を云ふ右ハ謂ゆる建得大造
之績ハ給へる是妙用あり久志美多麻比云ハ即其幸魂
の功用をいふ奇ト妙ト在し給へる御魂の謂ハ
て幸魂の佐子物有ハ非る多り若て石の短歌ハ河

米都知能等母尔比佐斯久伊比都夏等許能久斯美多
麻志可志家良斯母之有ハ天地の共遠久引く言續け
と此奇御玉敷一御在坐て其奇魂の高く貴く仰が
れさせ給へる御事を云らよて唯玉のそを詠るハ
非ずして其玉ハ副御在坐す神靈の御事を申せら
るゝ此の奇魂ハ事の別あるハ非る者あり言傳
美佐備伊麻須久志美多麻之有ハ石石を稱て奇き御玉
と云らるゝ魂の事ハ非ず即上ハ眞玉成す二の
石之有を以知べしと云はたるハ然る事あり上ハ
ハ石の事を云はども下ハ其神靈の御事を言て云
らるゝ心著れざり此ハ就て考らるゝ奇魂と申すハ
一説ありけり幸魂之奇魂と申す義少して幸魂ハ本体あり奇魂ハ

其妙用あり一物より二名有るハ非るあり右ハも
注るハ知く皇祖天神の靈威ハ資て顯身と坐出る始
ハ皇祖天神より各其職業を賦與して天降一給ふ是
を以て人の性ハ各得、所有て各、相同ト云はざり
て父此を子ハ傳ハ可くす子此を父ハ受へりす
して其入其事ハ限らる物有り是を佐知と云らる其本
語佐伎よて字ハ填る時ハ徳性ハ書てや叶ふ可り
ハ故山幸を能得る人有り海幸を自有オウラキミ人有り天
神より得奉らる幸の任ハ脩る時ハ身を立家を起し
て終ハ大造の功績を建らる至る者ハ其幸魂の大ハ

故瑞珠盟約章の
 伊弉諾尊功既至矣
 徳大徳と有り徳を
 伊弉諾に訓て其功
 既至矣と云ふ八例に
 之等第一の書に天
 神伊弉諾伊弉
 非州尊曰有徳者
 子五百袂瑞穂之地
 宜汝柱禰と有り
 之古事記に謂ゆる
 終程同成豊多陀
 用幣流は國に禰
 其御功業と成實
 之を給へりて徳
 亦大矣と云ふなり
 其徳と石の幸と
 合せて得て違はず

成りし者より奇魂の妙用此に在る事あり然るも彼
 山幸を海幸に易る如きに至ては元より天神の賦命
 非るか故に其守衛給ふ幸魂の其身を放りさせ給
 ふを以て終に其利を得ずして身を立家と起す事
 能はずある有けども世に云ふ幸と不幸との如きも
 各其皇祖天神の徳性の脩る所へ脩らざりければ過し
 出る事と所見たり今此を譬へむ日神月神の如き
 も始に柱御祖神の何不生天下之王者歟之詔給ひて
 天照太神の御生坐るか光華明彩照徹於六合之内と
 有る如くある故に天上より送擧させ給へる是其幸の

任に脩給へる者あり次は素戔嗚尊を生給へるは是
 性好残害に有る其御性は残害の御在り坐るは非と
 ども月神に爲て国土に照臨りて給ふ可き神に此國
 土を令御め給へる故に其始の程の御心行共は国土
 に就て残害の事と成れり者より其神隨ふして
 天下之王者に思ひて生給へる御子あり一日
 神に成給ひ一日月神に成りて御在り坐るに至りては
 其生成り給へり御父母二神の御心よす任に竟
 給らざる是即其幸を得て生出一の給へる皇祖天神
 の賦命に給へる所は終に歸りざる事を得ずある有

ける幸魂奇魂の妙用此に在る事の故彼顯祭天皇三年
御紀に於是月神著人謂之日我祖高皇產靈尊有預銘
造天地之功宜以民地奉之有て次日神著人云日
以盤余田獻我祖高皇產靈尊云々と有て其子預銘造
の御言を詔給へりを其一ハ上ニ譲りて略り以たり
者あり四百十此幸魂奇魂の所由を述させ給へり御言ふ
る事下四百十を待て明しむ可今近く此を曉してむ
順於道德而理於義窮理盡性以至於命ハ道德ハ和順
義理を窮理めて其天性を盡し一ハ我ハ徳性の
天より受る所を知ると至於命ハ云あり又故曰昔者
聖人之作易也將以順於性命之理云ハ易ハ性理を
明くめ天命は順ふたふり云事あり其性命之理を
云者ハ中庸ニ天命之謂性率性之謂道修徳之謂教

と云る是よて右の天命ハ此に謂ゆる皇祖天神の御
命よて性ハ右の山海幸の幸是あり率性ハ山幸
房ハ諸獸を獵し海幸房ハ諸魚を釣す一途ハ勤し
る事よて其天賦の幸を賜は時ハ相共小其利を失ふ
是牟子謂ゆる河伯雖神不能弱陸地人飄凡雖疾不
能使湛水揚莖と有如其天性ハ能得ざる事ハ終
よ其功を成す事の難き者あり所以ハ率性之謂道也
云て道ハ其條理を云事あり故ハ其伎術を立て
行ふ事を云り然れども其術を修る事ハ師此を傳へ
窮此を受て能其所以至る故ハ俗道之謂教也ハ云り
備天命は因て人ハ其天性ハ自得る所業を以て身を
立る事あり故ハ其本業を能かめて後任の事ハ及ぶを
者あり故ハ其本業を能かめて後任の事ハ及ぶを
狂す少り故ハ其本業を能かめて後任の事ハ及ぶを
賦の本業を守り才氣有る人ハ我ハ分身の事を志して天
業を忘る者あり能令才智有る雖も終り身を立る
事能はず然れども皇祖天神の賦與し給ふ所を考へ
て人を養はず己ハ長たらし所を以て此を貫きて功業
を遂べし其本業の若能我心ハ叶ハざる所所有る時ハ
天性ハ好ざらば事あり其不始る事ハ於て能成得

る車ハ難くあり有けしハ其好む所の業ハ轉換て大
よ得る所有る者あり其ハ可人の中ハ一人も甚難
有き事多て多くハ心の惑より我業を疎略ハ思ふ事
ありけしハ此天神の命令ハ一も我心ハ問て定む
外ハ無き然ハ其可畏き申事ハ在ハども古事記
者不りし
御父大神の御許より逃返して給ふ所ハ其汝所持
之生大刀生弓矢以而汝庶兄弟者追伏坂之御尾亦追
撥河之瀬而意礼爲大國主神云と詔給へハ數回
誡させ給へり上ふて正しく荒振神と撥干けて大國
主神に成給ふ可き神なる事を見立給へりよて其皇
祖天神より賦與し給へり幸の在る所を見定給へり
あり次ハ故持其大刀弓追撥其八十神之時海坂御尾

追伏海河瀬追撥而始作國也と有ハ御父大神の御命
を奉りて天然より自得させ給へり幸の任む物爲
させ給へり故ハ始より其事ハ於て始る所立り
者あり若て右ハ夫大己貴命與少彥名命戮カ一心經
管天下と有ハ其幸の任む物爲させ給ふ所を輔相
皇天より少彥名命を降して愈其功業を令成給へり
あり其後少彥名命の常世知ハ渡りて給へりよ一
時御力を落させ給へり雖も實ハ其神功業の大よ
成りて給へりあり其少彥名命ハ己く外國を開闢
此國の輔相と爲給へりよて其戮カ一心と云車ハ於

てハ猶初の如くある由傳廿九四百八十五丁ハ注るを以て
其然る所以を曉る可き者多し然して自後國中所未
成者大己貴神獨能巡造と有て遂因言今理此國唯吾
一身而已其可與共理天下者蓋有之乎と御言舉させ
給へるハ愈以て其御功業の大に成るを御在り坐け
るよりて始より幸魂奇魂の御幽質有る雖も其功に進
む事ふけとい其幸魂奇魂も亦大なるずして尋常ふ
る物より此大神の御成業に甚大あるに至りてハ又
其幸魂可魂奇之甚大に御在り坐て能共與相作成給
へる微驗も亦自然小に見はる事ある故に更に天上

より天降り御在り坐て如吾不在者汝何能乎此國乎
由吾在故汝得建其大造之績矣と詔して其始より相
成り給へる事の趣を述べ給ひ次ハ古事記に詔
ゆ能治我前者吾能共與相作成若不然者國難成の
御言を詔給ひて以後の御所置を掟させ給へるに因
て其幸魂奇魂の神助有る事を以前に鑿とさせ給ひ
て實に其御成功の天神に在る事と所知食り別させ
給ひて其御祭を善成させ給ひて万世に大國主大神
に万国に仰ぐれ奉らせ給へるに至りて給へる者ふ
り是を以て幸魂に申奉るハ人性ヒトノサマに従ひて其幸を授

依り給ひて愈其方と進め令成給へる神靈を申奉る
御名めて奇魂と申すハ其幸魂の任よ成行ふ時ハ其
自^何だ^よ測^因知^てれ^斯ざ^る妙用^云の此よ至りて^思顯^得は^しる^也
て即其幸魂奇魂共小皇祖天神の御靈を申奉らる者
ありけり又此を大物主神よて此大神の和魂神小坐
こ云ふとハ本より明らるる事共なぐり文ハ
續きよ依て又混るる事の益より非ず其心よて
思ふ可き者あり^{私記}ハ五行大義を引て今爰幸
魂者是魂神也奇魂是魄^也一鬼
也云こ又幸者行之義奇者久止之義歟と云る事ハ
我が古意よ非る者あり但上十^ハ下^ハよ云る事ハ如
く字鏡集よ魄を佐伎多麻と訓ハ古よ本より魄
魄よ配たり説ハ己よ在り物り其こハ大よ異あり

けり者あり又口訣ハ幸魂奇魂者一魂兩化之名幸魂
者念而先臨而就奇魂者不念而成是即天命一身之主
也云こハ慕^也疏^ハハ幸魂奇魂者魂魄之名子産曰人生
始化曰魄既生魄陽曰魂用物精多則魂魄強是以有精
爽至^于神明幸魂則陽魂主氣與生以慶幸故曰幸奇魂
則陰魂主形與死以可奇異故曰奇と注させ給へるハ
共^ハ推量^の業^ハめて實^也故^ハ此^ハ幸^ハ魂^ハ奇^ハ魂^ハり^ハ一^ハ皇^ハ祖^ハ天^ハ神^ハ
御在り坐て彼顯宗天皇御紀ハ謂ゆ日神月神の
御言ハ我祖高皇產靈尊有預^下鑿造^上天地之功と詔給へ
る預鑿造の御靈是ありと云ハ上^ハ十一^ハ小^ハ注^ハる^ハ如^ク
此よ吾欲往於日本國之三諸山故即管宮彼處使就而
居こ有る古事記ハ吾者伊都岐奉于倭之青垣東山
上此者坐御諸山上神也と傳りて此東山上と云ハ

神名式より大和国城上郡神生日向神社大月次と有る

是るゆひ此より後小大己貴神の國遊の御時より當りて其

和魂を八咫鏡より取託て倭大物主櫛甕玉命と御名を

称さる御在り坐り静給へり由出雲神賀詞より所見た

り即神名式より謂ゆる大神大物主神社名神大月次と相嘗新嘗

有る是るゆひ此より就て其大物主神社を大神と申す日

向神社を神と申して其域内より在り其両神の属社

あり各其差別有る事あり宇陀郡神御子美牟須比命

神社ハ右の大神大物主神の御子より坐りて神生日

向神社の御子あり可きハ抑美牟須比此と申すハ此より

皇産靈の書さして天地を造化る神の御上より限る

御車ありけり大物主神の御子より更り由命き事

ありけり偕美牟須比命と申す御子を持ち坐り御祖

ハ誰神と御在り坐り彼高皇産靈尊神皇産靈尊より

外より更り當べき神より御在り坐りけり如何

この為は是を以て此の幸魂奇魂ハ一も大己貴神を

即守給ふ神より其大己貴神の齋奉りて給へり皇祖

天神より渡りて給ふ御車を明り奉り可きあり有り

りこく此より此大己輪之神也と記し誤りたりよ

ゆい以来其惑を解く人古よりして且ても非りつりよ

白河宗因説唯
然者應之連而
疑也云々云々
たの言るなり

させ給へるを諾ひ奉らせ給へる所あるが本よ志加
理と訓と金澤本志加耶理と訓と事あり在と云々
言の續け様甚卑しくて如何あると古事記肥河上段
よ尔連須佐之男命詔其老夫是汝之女者奉於吾哉答
白恐亦不覺御名尔答詔吾者天照太御神之伊呂勢者
也云々尔足名推手名推神自然坐者恐立奉と有る此
御問對の事を例と爲て如此ハ讀る者あり私記よハ
和知之加奈利と有る事ありとも唯然を惠應緯ヲ惠ト云々と思ハゆトも甚く降リ事ハ
從リ難シ○法登廻知ハ廻知ハ礼理ト訓べシ其御言ヲ聞食
て御心ヲ識ル御在シ坐す義を以て答奉らせ給へる

あり志和理と訓いと思つた此ハ世ハ云ふ神託の如き所ありけレ其神語
を得奉給ひて御心ハ覺知ス給ふ意を以て訓奉る
可クりけり其義ハ已ニ傳ニ十三九ト云とハ今注す
よ及バす○汝是吾之幸魂奇魂ハ下ニ尔坐耶理の語
を添ふ可ク即御心ハ次著カさせ給ふ所ありあり是
即此大己貴神の大己貴神と坐す御車を見奉り知ベキ
所ありけり如何とあるが先ハ因言今理此國唯吾
一身而已其可與吾共理ハ天下者蓋有之乎と詔給へる
御言よ己命を除キて天下ヲを理シ可キ神あり御在シ
坐スりけり主張スて言放たせ給へるあり其御言

を仰へて加吾不在者汝何能乎此国乎由吾在故汝^得建
其大造之績矣と詔給へるは驚^りりせ御在^一坐て其
御名を問奉るに給ひけりは吾是汝之幸魂奇魂也
對へさせ給へりけりは露も疑の御心御在^一坐す
て此は唯然迺知汝是吾之幸魂奇魂と申給へりは其
用神を言向け大造の功績を得建させ給へりは其御
成功を顧見爲させ給ひて是も彼も己命の御カと思
ひ^一御事あり其も此も皆^らは幸魂奇魂の神
即多りけり事と御心は定めさせ給ひて其靈威を仰
ぎ奉るに給ふ可く思ひ成^らせ給へる御事あり凡

公事記に能^く我
前考吾能^く與
相作成不然者國難
成と有る其御言に
御旨と違ひ給へる
治奉るに給へる
私曲の御心御在
坐するも

御教い奉る可^き
御事共

一則と天神の相御
在^一坐て共

庸の遠く及奉る如所此に在る者ありは、
實は天下の大国主大神に御在^一坐す程の大器は、
渡り給ふに故は殊に幸魂奇魂の神助も亦尋常は
超て大に御在^一坐し申すも更なる御事あり上は、
一、刺へは其幸魂奇魂の正身を^一も正目に見奉給
いと治奉給ふと云ふは百千万神は殊勝^らして
其に尊く奇しく御在^一坐ある者なり^一谷重遠説は天已
末大績皆天功而非己力焉宜乎其終不陷危^ら而居享
也と云ふは實は然る言ひて大に其意味有る所あり
但天功は彼爾錄造天地に有る預錄造は等しくして
其相作成給ふ者なり^一て自然の天功は謂ふは非^ら車
右件條は^一○今欲、何處耶、今何處示住、思富
注るが如し

須登問給閑婆之訓べし次子對曰の語有るあり此
處古事記ハハ爾大田主神曰然者治奉之狀奈何之有
て甚愛たり猪何處ハ伊豆古ハ非ず古事記明宮段
大御歌ハ許能迦^此迦^{何處}夜伊豆久能迦^{何處}迦^傳毛ハ巨多布都奴
賀能迦^鹿迦^蟻余許佐良布伊豆久迦^{何處}伊多流^下第五^ハ子
伊豆久欲利枳多利斯物能曾又^又九之礼奈為能^{一云尔能保奈}
酒意母提乃宇倍尔伊豆久由可斯和何伎多利斯又^五
下鳥梅能波奈知良久波伊豆久之見元たり是古言ハ
少住ハ神靈の鎮り御在^御坐す御事ハ云り天孫降
臨章第二一書ハ汝應住天日隅宮者今當供造て在ハ

更あり攝津凡士記ハ所以稱住昔者云々住吉大神
現出而巡行天下覓可往國云々到於沼名掠之長岡之
前^{前者今神宮}乃謂斯實可往之國遂讀稱之云眞住吉
^{南邊是其地}之國乃是定神社今俗略之直稱須美乃歲之有類是
あり若て此ハ大己貴神ハ其住て奉る處を問奉
りて給へる趣あると古事記ハ其神の御言ハ能
治我前者吾能共與相作成若不然者國難成之有之其
御在坐一所を乞はせ給へる由見ゆ其正ハ然る可
くや侍るむ風神祭詞ハ我御名者天乃御柱乃命國乃
御柱乃命^止御名者悟奉^氏吾前^尔奉^年幣帛者云々品

乃 幣帛備 吾宮者朝日 日向處夕日 日隱處 乃
龍田 乃 立野 乃 小野 乃 吾宮 設定奉 吾前 稱辭竟奉
者天下 乃 公民 乃 作 物者五穀 始 草 乃 片葉 亦 至
氏 成 奉 問 奉 止 悟 奉 支 有 有 意味 同 卜 所 有 然
と 古事記 然者治奉之状 奈何 有 其御在所を
定めて 齋奉 給ふ 其幣帛の御事迄 小
も係て 問奉 給ふ 此 今 欲 何處 住耶 有
より 少 委 此 あり 記傳 治奉之状 奈
何 如此 問 給ふ 答 祭 状 を 如何 治奉 之 状 奈
唯 某處 齋 祭 之 教 給ふ を 思 へ 上 治 我 前 之
有 治 必 社 之 造りて 齋 祀 之 事 限 る 治
非 故 奈 何 有 状 治 め 問 給ひ 諸 答 治

其處 社を造りて 齋祀 云 車 不 と 教 給ふ あり
之 解 心 け 凡て 神前を治む 必 齋 祠 之
云 例 然 非 卜 状 奈 何 云 何 地 社 之
造む 問 意 の 含 る 諸 其 齋 祭 之 状 大
氏 定 る 式 有 此 教 給ふ 迄 非 可 云 云
凡て 亘 事 日本 國 之 三 諸 山 先 古 事 記 此 所
に 知 る 事 〇 日本 國 之 三 諸 山 先 古 事 記 此 所
を 答 言 吾 者 伊 都 岐 奉 千 倭 之 青 垣 東 山 上 此 者 坐 御
諸 山 上 神 也 有 此 御 車 を 注 して 後 此 説 及 ぶ
可 倭 之 青 垣 記 傳 十 二 五 十 青 垣 青 山 の 國 の
垣 成 て 周 廻 中 卷 倭 建 命 御 歌 多 那 豆 久 阿
袁 加 岐 夜 麻 基 母 礼 流 夜 麻 登 志 宇 流 波 斯 万 葉 一 十九
〇 日本書紀傳三十 〇 四百三十 乃 置 有 青 垣 山 出 雲 神 賀 詞 出 雲 國 乃 青 垣 山 内 亦 下

津石根ル官柱太敷立氏同国瓜土記ノ所造天下大元
 持命詔云々八雲立出雲國者我靜坐國青垣山廻賜而
 るど見ゆ山と云ずして唯青垣ノのと云々例ハ万葉
 六十三丁三よ若野離宮者立名附青垣隱云々是るり略下
 見えたりが如ク此委ト由ハ傳廿三二百三
 丁十一小己ノ注ト又廿九百八十上三百五山ノ注トカ
 丁十八如ク殊ニ其大和国ノも此御事ノ延ビテ其幸魂ノ育
 魂ヲ斎祠ト給ル由ト録テ出雲國ノ亞テハ大己貴
 神ノ都城ト爲サ御在ニ坐ケるル此國ノありけり
 證ハ神武天皇三十一年御紀ノ載ル此ノ其國ノ故

事ト復大己貴大神目ト曰玉牆内國ト有リ正ト此
 住セ御在ニ坐ケて其國ノ青山四圍ト形容ヲも
 玉牆ノ狀ト觀象ト給ヒて号ケて給ル以テ知ル
 したり但地神本紀ト此レ文ト等ト所ト欲ニ往ル於テ日
 本国青垣三諸山則大倭国城上郡座是也是故ニ神願
 奉ニ齋ニ於テ青垣三諸山ト有テ青垣三諸山ノ称有事ハ
 こと其大和の城内山ノ廻ト形容ト依テこト
 ハ倭之青垣トハ云ヘ三諸山ト其青垣隱ト中ノ一
 の山ハ在ス此ト局ト称ト非ト疑トハト
 ハ中古の混水言ル可ク又大三輪神三社鎮座次第

△玉牆内國ト言ハ美濃
 郡格ナ於テ後表
 案ハ天皇ノ御言
 案ハ淡路者水備
 國ノ倭ノ者青垣山ト
 也其全國ノ形容ト
 指テ青垣山ト謂フ
 思ハ山ト

△但馬國青垣山
三諸之神
上三垣山
御有、右、青垣山
御、思ふ、於、本
御室と云山、第、本
と御垣山と云、
開、

小其紀を引るよ、欲往於日本國青垣山故即管御室
於大倭國磯城縣青垣山云々と有るよて、其古名を
青垣山と云、如く聞ゆる事あるよ、其も彼記の倭
也青垣東山上と有る地名を心得たるよ起る事よ
て中、ある僻事よ不有けり古事記の意右の青垣三
諸山又ハ青垣山ある地
名の如く云ふハ非て大和國ハ青垣山四周りて
垣の如く列あり在る其東方の山上ある所と云ふて
青垣ハ凡ての山を差るあり東山上ハ記傳ハ御諸
けはハ大ハ其意味等ハ
山ハ倭の國中の東方に在て其山次實ハ垣知せり但
東山ニ詔答へるハ唯泛く東方の山と云事ある可き
を其東方の山中に就て御諸山をハ擇びて祭り、

り可、又思ふよ東方の山と云事あるハ東之青垣山
と有べきよ青垣をよ置て東山と有ハ一の山名を
指る、如くも聞ゆる故考るよ、神名帳大神大物主神社
の次、神坐日向神社大月次
新嘗有り此社三輪山の巔に
在て今高宮と稱すと或書よ云り然とハ御諸山の舊
名日向山と云、若然、ハ此記ハ東山と有る依て
彼神社の日向と讀べ、舊名の邂逅此神社に遺れ
る可、取と云ふ、た、東之青地山又日向山の説ハ如何ある
と、東山上を以て右の日向神社の御事と被定たる
ハ古今に稀るありけり、卓見ある者あり、此御社の御事

ハ次四百三十六下ト委ト注ト奉ル可ク一山上ハ次ト此者
坐御諸山上神也ト有レ此ハ山巔を云ふリ記傳ト
山上ハ岑を云ふ限ル又山邊の意ト非ズ唯山ト
云車ありト云レたラハ非ズ伊都岐奉ハ上ト能治我
前者ト神の詔給ヘるを以思フ其倭之青坂山ト
今坐テ齋社奉ル詔言給ヘるありけり其時未神主
多クを置キて其祀ト仕奉ル一め給ル時世の状あり
ざりけり直ニ其御前を齋キ其大神ト御許邊ト
御在ニ坐ケる御車右ト引ル後復大己貴大神目之曰玉
牆内国ト有ル此ト事ト以テ知ル又傳ハ十九ト

小注ル如ク大神大物主神社名神大月次
の如クハ大物主神一座ありト大三輪神三座鎮座
次第ト奥津磐座大物主命中津磐座大己貴命邊津磐
座以彦名命ト有テ三座あり中大物主神ハ鎮坐ル
ハ此ヨリ後メ天孫降臨ノ以前ト在ル車出雲神
賀詞を引テ下四百四十四下ト注セ如クありト同書ト
腋上池心宮御宇天皇御世神明憑吉足日命曰吾國造
大己貴命也云ト隨ニ神託ニ瑞籬於大三輪山遣吉足日
命令崇ニ齋ニ大己貴命大物主命云ト有ルを以思フ其
大己貴命ト當昔ト魂奇魂神ト一此ト始テ齋

祠とせ給へる御霊の此は鎮り御在り坐けり
ハ有けり
凡て伊都岐奉と云ハ其斎く人有て仕奉
者阿曇連等之祖神以伊都久神也と有り此は綿津見神
出生章第六一書ヨ其三神ノ御事ト是阿曇連等所祭
神矣ト書サト瑞珠盟約章ヨ三女神ノ御事ト此則筑
紫胸肩君等所祭神是也と有る例を見度ト此も
其格の内なる此者坐御諸山上神也ハ此は謂ゆる日
本国之三諸山ヨリテ大三輪神三社鎮座次第ヨリ即管
御室云々號曰御室山或作三諸山と有て三輪山の元名
ら其も此は太己貴神之幸魂奇魂神之御倉御室
を建て持斎り仕奉り給へるより起れる稱る事
次は注すを見て曉る可し己は三輪山の号出來り

大倭神在注進狀
腋上池に官御宇天皇
元年云々天皇夢有
一貴人對之殿戸自林
大己貴命曰余神魂自
神代類三諸山高助神
事記水相官殿ト
於御諸山并祭意
富美和大神之前
有以此ハ其

後ハ猶其古名を被用り事多在り崇神天皇ハ御
紀ハ初踐大虛登干御諸山其四十八年ハ兄豐城命以
夢辭奏干天皇曰自登御諸山向東而八廻弄槍八廻擊
刀第活目尊以夢辭奏言自登御諸山之嶺繩組四方逐
食粟雀景行天皇五十一年御紀ハ是蝦夷等云々仍令
安置御諸山傍未經裁時悉伐神山樹叫呼隣里而骨人
民雄略天皇七年御紀ハ朕欲見三諸岳神之形或云此
為大物代主云々乃登三諸岳岳捉取大蛇奉示天皇云々
繼体天皇七年御紀ハ歌ハ美母盧我訶落上你能明梨陀
致敏達天皇十年御紀ハ乃下泊瀨中流面三諸岳漱水

よて此神の現出生一ハ出雲国五十狭々小行ふを
其乞一給へり御言の任ハ大己貴神の供奉り給ひて
治奉りて給へりる大己輪神三社鎮座次第ハ此
を宮ニ云す一ハ管御室於大倭国磯城縣青垣山之書
一ハて宮の事を御室ニ云換たハ傳十五二百四ハ引
馬見岡神社四月御祭宣文ハ天穗日命乃和御魂
咫鏡仁取託八重柳葉仁取懸天出雲国利彦健忍雄心
命此国仁到給比川楸田乃邑天仁志国造乃新仁造奉礼
御室仁天乃小管乃斯敷次乃日村人乃導奉天利志奴乃
谷川乃天翔乃高日乃嶽仁齋比奉利と有ハ其神宮

の御事を御室ニ申せりよて天孫降臨章第二一書ハ
謂ゆる神籬是るハ其ハ崇神天皇六年御紀ハ故以天
照太神託豊鍬入姬命祭於倭笠縫邑仍立磯堅城神籬
神籬此云比芥吕岐と有ハ儀式帳ハ謂ゆる美和乃御諸宮の御
事ハ丹後凡土記加佐郡田造郷の所ハ豊宇氣大神の御事を則テ其地
建神籬以迄祭大神ニ有ハ即真名井原艷宮を云ふハ
是即神籬ニ御室ニ相同トキ證るハ若て古事記朝倉
官段大御歌引田部赤猪子ノ賜ハ美母呂能伊都加斯賀母登加斯賀母登本
由志斯伎加母加志波良衰登賣女有る美母呂ハ御室
小て三輪山を云い巖櫃之本ハ御室を之爾く事ハ係其官人

赤猪子の事を詠給へるあり忌^シ然哉ハ神の甚可畏
 き事の其女の老^レ魄^ハ成^ル事^トを詠給へるあり御答^ハ美^御
 其厭^ハ世^ヲ給^フ御意味^ヲを述^セ給^ヘるあり御答^ハ美^御
 母^諸呂^都久^夜多^麻加^岐都^紀阿^麻斯^多尔^加世^余良^牟。
 加^神微^能美^官夜^人比^登と有^ル都^久夜^多麻^加伎^ハ次^ヨ云^ル
 三^諸就^ト同^トくして御室^ノ玉^垣の築^立と云^都紀
 阿^麻斯^ハ築^令餘^ル多^尔加^母余^良牟^ハ誰^乎將^依
 て築^餘すとも他^ノ用^ハ使^ヒ難^トとめて^結句^ハ其
 大神^{神社}に仕^奉る事^ヲ明^シ申^セるあり又^下葉^三
 六^下小^吾屋^戸尔^御諸^乎之^而有^テ小^祠の宅^内に營^心

又三^下本^神意^而余
 三^諸乃^神佐^備而^余
 亦^波不^在と有^ル其^意
 本^神意^而余^神
 社^有と有^ル其^意
 と云^ル

事と云ひ六^四十^五と三^諸著^鹿脊^山際^不七^六と三^諸就
 三^輪山^見者^ハ有^ル三^諸著^ハ御^室ハ築^めて神^ノ御^座
 として御^垣と結^廻りして仕^奉る由^{あり}二十^五と祝
 部^等之^斎三^諸乃^大馬^鏡懸^而俣^と有^ル祝^部之^斎祠^ヲ
 神社^ノ御^事と云ひ十九^三十^五春日^祭神^之日^歌と春日
 野^尔伊^都久^三諸^乃と有^ル遣^唐之^御祈^ノ爲^メ神^殿を
 設^けて斎^祭る事^ヲと云^{あり}人^傳十九^三百^七と小^舉て注
 せ^る神^樂神^歌に加^美加^歳乃^美牟^呂乃^世末^乃左^加歳
 波^と加^美乃^美末^戸仁^之分^利阿^比仁^分利^之分^利阿^比
 仁^分利^又左^加支^波仁^由不^止利^志天^ニ多^加與^ニ加^加

石引文と御室
は事と云ふは此
取出たか

美能美牟呂伊波比所女介牟る所見たりと推渡
して思を致す可き者あり 記傳十五卷四十一丁下此
母呂岐と云初ハ榮樹を去
て其を神の御室と爲て祭るあり 云名よて榮室
木の意ありを布志を切りて此と云なり万葉三二五
屋戸尔御、諸字立而是榮樹と云ふ又十一
神名火尔細呂す立而 又二十子不波奈加能阿須波乃
可美尔古志波佐之是等七回トと有て神籬と三諸と
を一よ見ると云たりハ實は然る詔あり少て予ハ心
ハ此母呂岐の比ハ美ニ同義ありや御調を口詞
御子と比古とを相通ハ云、る是あり諸又右の馬
見國神社四月御祭宣文ハ親仁饋留野邊乃と有る
昨字ハ公文徳天皇實録ハ昨を比母呂岐と訓ハ漢籍礼
記ハハ福字を訓ハ此等ハ穀梁傳ハ宗廟祭肉生豚
熟曰膳と有る義ありハ此等ハ其神社の祭祀に用る
事あり故ハ其稱 借其御室と云事ハ起ハハ出雲風
と借とるの
上記ハ九原郡御室山郡家東北一十九里一百八十步

神須佐乃乎命御室令造給所宿故云御室と有か如く
して本臥居の稱あり 和名抄ハ室白虎通云黃帝作室
以避寒暑 和名
益呂 有ハ其天下ハ臨じ正寝ハハ非ず
て此ハ寢室を云と聞ゆ綏靖天皇前御紀ハ會有乎研
耳命於片丘大嘗中獨卧于大牀云云吾當先開嘗戸尔
其射之と見え天武天皇朱鳥元年御紀ハ是日御窟
殿前而倡優等賜祿有差又乃設齋於御窟院と有る
共ハ内この方ふる臥居の事と所見たハ被新室稚室
ふどの室ハ其腹臥る料ハ作る義あり可干ハ本より
よて上件神社の御事ハ御諸と申すハ其齋祠ハ神靈

の人もて云い臥居ふどの状もて内々の御住處と
成し給ふ謂ふて其事異ありと雖も其趣同トウ可
し諸御室ハ神社と云ふも次第の有る事ありて一よハ
彼賢木を刺立て直し神の御室と爲る者有り右よ舉
たり万葉三四十よ吾屋戸ル御諸宇立而十二二十よ
神名火尔紐呂寸立而雖忌二十二十よ尔波奈加能阿
須波乃可美尔古志波佐之河例波伊波と宇と有る類
是あり二よハ神木を直し御室と云ふり彼朝倉宮殿
大御歌よ美母呂能伊都加斯賀母登加斯賀母登由こ
斯伎加母と見え万葉二二十よ三諸之神之神須疑七

四十よ三幣帛取神之祝祝我鎮斎杉原あど有る右等よ
内よ隠りたり所有よ非れとも神の御宿り坐る意
を以て其よ御室の例共あり三よハ垂仁天皇三年御
紀天日槍の時来き神寶の中よ熊神籬一具と有る
是あり玉勝間念草卷よ此ハ韓国ありて神を祭るよ其
神体を令坐る具もて世よ佛像を收置く厨子と云物
あどの如く作たる物あり可し其ハ皇国の神籬とハ
様異りて外を圍て内の頭よ見えす隠る故よ隈
神籬と号けたりあり可しと云とたる是あり今も出
羽国の方言よ神社の内殿よ收めて神休を令坐奉る

△黒木と云て柱

小祠を御室と云る以て思合す可一四よハ一ノ葉十三
四よ五十串立神酒座奉と有る五十串も石の神籬の
例ふツリ天孫本紀ノ宇摩志麻治命先獻天瑞寶亦堅
神楯以斎兵謂五十櫛亦云今木刺綾於石都主劍大神
奉斎殿内と有ハ傳サ一_百二_百注_々が如ク宝鏡開始
章第ニ一書ノ謂ゆる五百箇真坂樹之六十五籤の類
る_々五十櫛ハ斎串今木ハ斎木よて此を刺圍ミて神
体を藏め奉_々車右件ノ謂ゆる御室ノ非ず_々何_ハ
今も大和国_ノて_ハ七月の靈祭ノ祖先の神靈を招き
て祭_ル櫛を宅内又ハ椽先_ルど_ハ構_ル車_ノあ_ルが_ハ木
檜又ハ檉_ルあ_ルの青_キ葉_を以て_ハ圍_ミ屋_子も_ハ嘗て_ハ針_ふ
と_をハ用_ひず_ハ葛_{以て}編_て作_るふ_ハ祠_の如_キ物_{あり}

名ハ何_コろ_ク予_知き_程よ_て其_心無_キ時_{あり}け_とハ
聞_も為_りざ_りり_りど_も今_ハ其_清く_潔き_事を_目し_著て
思_ゆる_ハざ_りり_ハ又_ハ一年_六月_の頃_もや_有け_じ東_海通_を
下_りけ_るハ尾_張参_河の_国ハ津_島社_の神_を村_とよ
祭_りて_謂ゆる_ハ過_祭の_状あり_ける_ハ其_も青_キ木_葉を
以_て作_るふ_ハ祠_よて_大和_の方_{より}ハ_火ノ_巧も_よて
後_世め_りず_ハ非_りけ_とハ_共よ_上古_の神_籬の_遺
詞_{あり}者_{あり}因_云和_名板_土類_ハ檉_ハ雅_注云_檉一_名
河_柳和_名也_呂と_有ハ_然る_ハ神_籬の_圍い_ハ立_巡す_事よ
古_く用_来る_を以_て其_室の_言を_名と_爲る_者あり_めり
五_よハ_上よ_注る_ハ如_ク此_ハ故_即管_官彼_處と_有と_大
三_輪神_三社_鎮座_{次第}ノ_管御_室於_大倭_国磯_城縣_青垣
山_と有_て此_幸魂_奇魂_神を_鎮奉_々神_官の_御事_を御_室
と_云て_御諸_山の_称号_の起_る事_ハ即_神生_日向_{神社}
大_月次_の御_事よ_て大_神大_物主_{神社}の_御鎮_座より_ハ
新_嘗

慶_二以前の御事_一より又其所より引_レ馬見岡神社四月
御祭宣丈_一新_ル造奉_礼留_御室_仁天乃小菅_并荊敷云
又_レ万葉_七_{三十}丁_一木綿懸而祭三諸乃神佐備而十二
十五_丁祝部等之斎三諸乃十九_{三十}丁_一春日野尔伊都
久三諸乃と有_ルと何_レと神社の事と云_ル例_レあり
借上古の神の御室の状_一も上_{六十}丁_一注_セ播
磨_凡土記_一神前郡多馳里所以云_レ邑_{オホ}日野_ノ者阿_ノ遠_ノ須_ノ伎
高日古_ノ屋_ノ命_ノ神_ノ在_ニ於_ニ新_ニ次_ニ神_ノ社_ニ造_ニ神_ノ宮_ニ於_ニ此_ニ野_ニ之_ニ時_ニ意_ニ保
和_知荊_廻爲_院故_名邑_日野_ニ有_ル意_保和_知ハ_大嫩_茅
めて_レ万葉_{十四}_{二十}丁_一謂_レゆる根_夜波_良古_須氣_の類_子

可_一其_{三十}丁_一武路我_夜乃都_留能_都追_美乃と有_ル
室_草之_蔓之_節之_よて室_ハ草_を以_て屋_ノ菅_ヲ壁_ノ菅_ノ
ひ_ノ葛_藤を_用ふ_ヲ謂_レ是_{あり}大_菅官_儀ハ_菅以_青草_菅
廻_以葦_云高_菅御_倉條_ハ菅_節以_青草_と見_え大_菅官_儀
條_ハ横_以黒_木菅_以青_草其_上以_黒木_為町_形以_黒葛_結
之_云壁_菅以_草と有_ル此_彼思_合せて_上古_の官_造の
状_を知_ル可_一即_頭宗_天皇_御紀_室寿_御詞_ハ築_立推_室
葛_根築_立柱_者此_家長_御心_之鎮_也取_舉棟_梁者_此家_長
御_心之_林也取_置椽_檣者_此家_長御_心之_斎也取_置蘆_葎
者_此家_長御_心之_平也取_結繩_葛者_此家_長御_心之_堅也

取菅草葉者此家長御富之餘也之所見たり 右の武路
就て其こハ別ある事あり仁徳天皇六十二年御
紀^上是歲瀨田大中房皇子獵^干關鷄時皇子自^{山上}望
之^野野中有物其形如廬仍遣使者令視還來之曰窟也
云^問問之曰在其野中者何窟^{兵啓}兵啓之曰冰室也皇子曰
其藏如何亦奚用焉曰掘^土土文餘以草蓋其上^{敷敷}草葉
取^氷氷以置其上云^ここ有^ハ謂^{ゆる}氷室の事あり^始始
其^形形を廬と見給ひ此を令視給へ^窟窟あり^故故其狀
を令問給へ^るる^氷氷を藏し^るる^下下^小小茅萩を敷き上^よよ
ハ草を蓋へ^るる^をを以て氷室の名有る^ハ此も右件^のの
室の如く草を以て蓋ひ藏^せる^をを以て室と云名^ハ有
あり^六六^ハ右^{神垣}神垣を以て蓋ひ^{御座}御座^とと云^{なり}なり
けり^六六^ハ右^{神垣}神垣を以て蓋ひ^{御座}御座^とと云^{なり}なり
引^部部赤猪子の歌よ美母呂
尔都久夜多麻加岐都紀向麻斯多尔加母余良牟加微
能美夜比登と詠る^よ就て考有り引^部部ハ記傳四十
一^{二十}二十^九九^下下^注注^ててきたる^ハ如く大神朝臣の^支支別あり

けり^ハ其仕奉る大神大物主神社^{名神大月次}の御事
相嘗新嘗
よ寄せて我身の上を述べたる者あり其ハ大三輪神三
社鎮座次第^ハ當社古来^無無^室室^倉倉^唯唯^有有三箇鳥居而已奥
津磐座大物主命中津磐座大己貴命邊津磐座少彦名
命と有^ハ如く上古より以降唯右の磐座有の^とあり^ハ
て^宝宝^倉倉^のの^設設^非非^りり^ハありけり其下文^ハ今少彦名命来
^臨臨^吾吾^邊邊^津津^磐磐^座座^與與^吾吾^及及^和和^魂魂^共共^能能^可可^敬敬^祭祭^守守^皇皇^孫孫^湊湊^人人^民民
矣於是起^立立^磐磐^境境^崇崇^祭祭^少少^彦彦^名名^命命^と有^て其磐座即磐境
の事あり^ハ神の御座所あり者あり同書^ハ腋上池心
官御宇天皇御世神明憑^吉吉^足足^日日^命命^曰曰^吾吾^國國^造造^大大^己己^貴貴^命命

也大初己命之和魂取^託記ハ咫鏡名曰倭大物主御魂玉
命鎮座大三輪神奈備云々令造瑞籬奉齋隨神託之瑞
籬於大三輪山令崇齋大己貴命大物主御^所と有る令造
瑞籬奉齋^馬上古御鎮座の初と云ハ次ハ隨神託之
瑞籬於大三輪山と云ハ其孝昭天皇の大御世あるカ
共ハ瑞籬と有て神殿と云ざるハ其瑞籬を以て御室
と爲させ給へるありけり故美母呂尔都久夜多麻加
岐と詠るハ神の御室ハ玉垣を築くと云事とて其瑞
籬と云るを云るハ神樂神歌ハ加美加幾乃美牟呂乃
也末乃と有る御諸山ハ神垣を以て神殿と爲る意味

と所見たり然とハ右ハ有三箇鳥居而已と有る鳥居
ハ其神垣ハ著たり者ありて上古ハ瑞籬と云ハ此御垣
を云マ所見たリ五葉 六 四十一 三諸著鹿背山際尔
と有ハ御室築く垣を兼て他の鹿背山と詠るあり七
六ハ三詣就三輪山見者と有ハ其御諸山の事あるハ
本イの瑞籬を詠るあり但御垣ハ神殿有る其外を
圍む物ありけり御室と云ハ云々如く一應
ハ思ふ事あると云^{御室ハ}神靈の其中ハ隱り御在り坐す
云々ハ其形ハ抱る可きハ非ず但社ハハ神殿の
設有と此ハ瑞籬を以て室^カ爲させ給ふ所以

全真の撰抄は終日三篇
に草輪の山上に置
て各三三三三三三三三
上代に草輪下宮と
敷て御座と此表の例

本著て考ごごは得知とごご事あるを思ふ可し然
して此築廻りせり瑞籬ハ即御室ハ謂ゆる神籬の
御事あり又石の磐座ハ即磐境ありを以見し此社ハ
神殿をバ構へてすして彼天津神籬天津磐境を起之
て祭らせ給いまる御事よる心有けり但崇神天皇八年御
根子全祭大神是日活日自舉神酒献天皇仍歌之曰云
如比歌之宴干神宮即宴竟之諸大夫等歌之曰宇磨
佐開和能等能阿佐拓珣毛伊身氏由介那弥和
能等能渡鳩於是天皇歌之曰宇磨佐開階弥和能等能
阿佐拓珣毛於辞寐羅箇祢弥和能等能渡鳩於是
開神宮門而幸行之と有て此ハ三輪の殿戸を詠と又
古事記同段は従系尋行者至美和山而留神社と有て
古記の趣ハ然るる小猶紀略ハ一條天皇長保二年七
月十三日奉幣廿一社依大神社室殿鳴也有辞別ニ見
えて神社の御在し坐ける由あり右の大三輪神三

ハ比真吉吉知録四卷之
歳仲久十九日二十
二程音の多し書
さしと又

ハ比真吉吉知録四卷之
歳仲久十九日二十
二程音の多し書
さしと又

社鎮座次第ハ貞和二年十二月朔日出雲椽大三輪
君判と云真書有て其文ハ此書有他家採納家然後北
畠大納言殿今出河宰相殿詣参之時此書を御覽有て
被仰て去ふ云々若大三輪氏傳學之人所爲歟云と
見えた云々其真和九年以前ハ書せりありり
僅ハ十年程の隔あり當社古来並寶倉唯有三
箇鳥居而已と有て然計の傳を失ふ間ありごご其
寶殿鳴動と云ハ今云ふ幣帛殿を以て祭祀の場と爲
る事ありハ其を云ふや有るじ且上古ハ神社と云ハ
ハ其瑞籬を云事石は注る如く多きハ故此大己貴神
宮殿の事と云ハ心得有べく思ひ
此ハ幸魂音魂神の現と御在し坐て吾者伊都岐奉子
倭之青垣東山上ニ詔給へる神教を仰奉りて給ひて
御室を此處ト作奉りて齋鎮の奉らせ給へる子起り
て此より御諸山の名ハ出来又其大神を八戸桂復

御諸命ニ稱奉らせ給へる者と所見たり此御名ハ上
百九十九丁又ハも注し奉るが如く播磨凡士記ハ美
囊郡志深里坐於三垣神八戸挂須御諸命大物主葦原
志許國堅以後自天下於三坂岑と有て此ハ戸挂須御
諸命を主神と爲て大物主神葦原魂男神ハ其從祀
り國堅以後と云ハ此ハ自後所來成者大己貴神獨能
巡造と有る御時を云ひ自天下於三坂岑と云ハ大己
貴神の御言擧の御時ハ當りて出雲國の五十狭小
江ハ御在り坐けり其初て天降り著せ給へるハ其
地ふる事と明し可き證是るり若て其大物主神葦

原魂男神ニ柱の其從祀として御在り坐す御事より
思合す可き所以有けり其ハ此幸魂奇魂と齋奉らせ
給ふ神坐日向神社大月次ハ古事記ハ此者坐御諸山
上神也と有て此ハ大三輪神三社の外ありハ別として
其大三輪神三社と云ハ大物主命大己貴命少彦名命
三神ふるが少彦名命を祀るハ清寧天皇の大御世よ
りの事よして神代より御在り坐ハ大物主命大己貴
命ニ神ふる由鎮座次第ハ書せり趣もも合るを以て
上古ハ此御諸山ハ祭る所と其御坂神社ハ祀る所と
少りも異なる事なきハ思を致して其所由有る事を

合外と銘寒きて内
と懸りくは爲り物
るの謂めて

合復神天皇則御
八戸間傳居於
床有るを云ふと
賜能い詠る和名
は神代傳居於
此の戸有るは
八戸即夜
を知らし神の御
の御在り云ふ
る意味と懸り
非ずかひ有る

曉々可き者ありけり若て其八戸桂須御諸命之申
奉る八戸桂須ハ御室と云ひ發語ありて室ハ戸を
云公天孫降臨章ハ毎戸室を宇都牟呂と訓るハ虚室
の義あり此殊更ハ戸を云く設くしたる物より其
常と云ふありけり此反を見て戸を繫く閑るか
室の當然ありを思ふ可ハ八戸ハ寛平燕田縁起ハ作
假度八間一面間ハ戸ハ見え山城凡土記ハ造ハ尋尾
ハ八戸扉と有る是あり桂須ハ爲拭めて謂ゆる殿騰
戸よて民間ハ云ふ釣戸ると云物の如く上ハ釣有て
其ハ懸るるの謂あり有けり御諸命ハ彼鎮座次

第ハ故即管御室於大倭国磯城縣青垣山使就而居號
曰御室山或作三と有か如く御室を管りて鎮奉る也
給へる義を以て神の御名とも稱奉る也給へるあり
今其一例を示さむハ古事記ハ此時伊邪那岐命大
歡喜詔吾者生生子而於生終得三貴子即御頸珠也玉
緒母由良近取由良迦志而賜天照太御神而詔之汝命
者所知高天原矣事依而賜也故其御頸珠名謂御倉板
舉之神云事有記傳ハ卷八下子御倉板舉之神此
ハ御祖神の賜いし重き御室と爲て天照太御神の御
倉ハ藏の其棚の上ハ安置奉て崇祭給ひし故の御名
る可しと云ふたりけり如く己ハ其御頸珠を奉
せ給ひあり其珠を云ふて藏の置く所を以て御
倉板舉之神と稱奉る也給へる此と其意味相等し
考ふ可し故此御諸山上ハ御在り坐す幸魂奇魂
神也一ハ神坐日向神社大月次と稱奉る御事

右百二ノ記傳を引て注るが如く古事記ノ其神
言能治我前者吾能共與相作成若不然者国難成尔大
国主神曰然者治奉之状奈何答言吾者伊都岐奉于倭
之青垣東山上と有る其神の御言よ倭之青垣東山上
と詔給へるよ依とる者多し何を以て日向とすも殊
更よ申すとあるハ風神祭調よ吾宮者朝日乃日向處
夕日乃日隱處乃龍田能立野乃小野尔吾宮宮波定来氏
吾前々稱辭竟奉者と有る意味して右よ東山上と詔
給へるハ大和の城内の東方ある山上よ齋祠ととの
義ある物り其山上の四方を見露らす處ハ朝日よ

直向ひ夕日の日照る地あるを以て此よ御室と管り
仕奉る也給へる詔ある名稱して即其幸魂奇魂神
ハ一も高天原よ神留坐す皇産靈神の御靈よ御在
坐すよ其神氣の相通つて給ふ焉然物爲る也
給へる御事と所見たり又八戸挂須御諸命と申すハ
其御室よ八扉を鑿して刺固めたる如く祀ひ鎮めて
神氣の離散と御在し坐さる可く仕奉る也給へるよ
て自然よ鎮魂の義よ相合ハせ給へる御事よ後世
神社を齋祠と事の摸範と爲す可き證是るり忽卒よ
省過し奉る事勿と即大和志よ在三輪山嶺今称高宮

と有る是あり神階の御事、清和天皇實録より貞觀元年正月廿七日甲申奉授大和國從五位下神坐日向神從五位上と見ゆ、諸内藏寮式大神祭夏祭料の中、緋帛ニ大日向王子幣料盛管一合と云事有り其日向王子ハ宇陀郡神御子美牟須比命神社の御事りとも思ゆとども猶此神社の御事ありけり別宮小社の神を其本宮小就て王子と云例ありば強ふ久子の義より取べきは非ず若て鎮座次第を見よ此神坐日向神社の御事見えず其別宮小社之事と有る中より五府神社天日事振魂命云々各高皇產靈尊之子主五臟肝心脾肺腎五穴目耳口鼻陰元之事と有

ハ此より當る可き、其神名より天日事振魂命と申す日車ハ毎日の義あり可く振魂ハ傳十九四百三十八丁四百四十五丁より注るが如く鎮魂を美多麻布理と云ひ廿九二百八十五丁に恩頼を美多麻能布申と訓ひ、一等して其幸魂奇魂の日毎小御靈幸い御在り坐す義あり合ふよ其下より高皇產靈尊之子に在り上件より注る幸魂奇魂ハ其高皇產靈尊神皇產靈尊より出たる義あり相叶いて聞ゆべき此を除てハ非ト、と思ゆ然るハ大和高志高宮ハ多迦美夜ありと字音より古字とも云ふりけい、五府神社と呼ぶ事と成まるとし、其天日事振魂命とも稱申すより、府會せて余より四神の名の設て五臟五穴の神とハ強言せざるをり、右の天日事振魂

命の次は天道本性命天氣壽魂靈命天爪表通精命天
人休振魂命也と云ふ四神の名有とど何と云ふ後入
の作名もて更よ古意よ非物り右よ云ふ如く
天日事振魂命ハ幸魂奇魂を称奉り御名を思
よ本就て大兵其御功用の状を以て然る神名を思
寄山にみこも有べし此五府神社今山上に在り山下
に在り知るぬども若山上あり右の高宮を高神社
と申けしを訛傳たるる可く又山下に大神社
の境内に在り其遠社もて次く高宮の御神を其所も
して被祀りありけり儲又右の五府神社の御事より
思出けり出雲国杵築宮もて大國主大神の外
客座五神と申す御在り坐けり國造千家北島兩家
に祭神の異説有て北島の家説は客座五神ハ大國
主神の御子神等ありと云ふ千家もて其客座ハ
御在り坐すハ古事記に謂ゆる別天神五柱あり此五
神ハ本より大國主神の祭祀に給へり天徳日命御子
此國を皇御孫尊と避奉給へり時天徳日命御子
代りて祭る可しと有り所以に祭るあり此故に
天神五座ハ正面より南向に御在り坐し大國主神ハ
西面より脇座ありと云ふを今迄心よも留さりし事

ありしりども此説の成りしよ就念ふ其客座五
神ハ本より大國主神の祭るに給へり五柱の別
天神ハ御在り坐す云ハ被幸魂奇魂の祠に現出
せ給へり其五十杖に小江もての事ありけり其
御室山に治奉り給ふ以前ハ御許もて持斎りて
奉給いけし其移り奉り給ひ以後も猶斎奉
客座五神の例ハ非ト然れども何れも右の
の幸魂奇魂神もて渡り給ふ○使就而居ハ就而ハ
御事も於て異多ざるあり
私記より由岐豆と有り即四神出生章第十一書に宣
示月夜見尊就候之神武天皇甲寅年御紀ハ何不就而
都之乎あと有る其例あり使居ハ麻志麻佐志年と訓
り儲御紀ハ件の幸魂奇魂神をいも大己貴神の和魂
大物主神の心よて書さるるが改小出雲より其神

と出立し遣て三諸山之處を得させ給へる事を取成
さしたりけども上件事か今茲より平一辨ふ如く
其必しも然し非りけり古事記よ其神の御言
よ能治我前者云々詔給へるよ對へて尔大国主神
曰然者治奉之状奈何答言吾者伊都岐奉之倭之青垣
東山上之有か如くして其伊都岐奉と云ハ誰、有じ
其大国主神よ斎祠に仰給へる御言るの然る時ハ此
の就而 居、就而使居の如く見此就而ハ 大国主神の行向ひ御在し坐けりよて其使
居ハ其安置奉る事を云ふ取べし即倭之青垣東山上
よ御營室とせ給ふと云ハ謂ゆる神籬を建させ給へる

よて其現と御在し坐けり神靈を此よ齋奉らせ給へ
るありはあり使居坐を麻世麻都流と云義よ心得へり
ハ記傳十七三十三廿五三十三五三十三引ねたる清寧天皇二年
御紀よ便起柴官權奉安置ル顯宗天皇御紀よ於是悉
發郡民造官不日權奉安置乃詣京師末迎二玉之有ハ
更るり欽明天皇十三年御紀よ大臣跪受而忻悅安置
小墾田家敏達天皇十三年御紀よ請其佛像二軀云々
經營佛殿於宅東方安置ニ勤佛像孝德天皇 大化
四年御紀迎佛像四軀使坐于塔内ありハ負氣無き事ふ
か蓄神の事よ云るあり万葉十二十八よ高々尔君

千座而十五三四比等久尔二伎美宇伊麻勢豆ふと
も有て麻世ハ使坐シの切りたる古言是ふとハ此の使
居ニ其甚能符合へり然るを御紀の如くハ官を彼處小
管りて幸魂奇魂神を出立し遣り
て其三諸山を居處も今爲給へり状よて如何あり車
共あり此ハ大己貴神の供奉り給ひて其神籬上坐
め奉り給へりハ○此大三輪之神也此ハ撰者の注
叶ハざる所ありハ加ふとたり文よて古傳ハ非ハ敢ハ難ハ爲ハアハ
よ似たりと雖も甚ハ下ハき僻事あて上作の事共ハ大
よ背ける者あり此一の誤より延て地神本紀もハ此
大三輪大神ニ書ハ大三輪神三社鎮座次第も益大
己貴命之幸魂奇魂鎮座干當山是神代也此大三輪大

物主神走也是と有ととも共ハ正ハき古傳の旨ハ非
る者あり此所ハ古事記ハ此者坐御諸山上神也ニ書
ととたりふハ實ハ古説ハ聞えたる然るハ御諸山
上神也ハ右三四百二御諸山條ハ注ハ奉り給へり如く神
名式ハ謂ゆ大和国城上郡神坐日向神社大月次と
有る此御事ハ一ハ即大己貴神の幸魂奇魂神を斎祠ハ給へり
神籬是ハて本より大三輪神三社の外あり者あり
上十六下又四ハ注ハ奉り給へり如く此ハ大神社ハニ神社
百十四下ハとの差別有て其大神社と申すハ即大大神物主神社
名神大月次ハと有る是あり此を本ハとて其大神物主神
相嘗新嘗

に属る共よて同郡狹井坐大神荒魂神社歟添上郡率
川坐大神御子神社三座あり所見たる是あり神社ミラセニ
申すハ右の日向神社ニ此に属るハ宇陀郡神御子
美牟須比命神社と有る是あり如此く大神と神ニ
ハ差別有る事ありを彼幸魂音魂神とハ亦名を八戸
挂須御諸命とも稱奉りて其御諸山上あり神坐日向
神社に御在し坐るる其大物主神と打混りして此
ハ大三輪之神也と有るハ甚しき誤とい云るが但其
を大三輪山に坐す意あり必しも其大物主神を指し
非ずとも由けてハ云べし然しとも其より兼て此神

之子即甘茂君等大三輪君等云々と續きたるハ大物
主神に當らざる事を得ず然るハ古傳に誤益くして
記者の注す所と相違有る者ところ思はるれ然るを
鎮座次第に此大三輪大物主神是也と注せるハ御記
よす己に誤る程の事ありけれハ彼山上に御在し
坐す日向神社ありと思寄る可き非ず其幸魂音魂
神ハ大神大物主神社と僻心得したる者よして同日
の論るが其別宮小社の中は扱ひたる五府神社と
間ゆるハ甚く後世めきたる社号あり有れども其御
諸山上社を高宮とも申す事ありが其止事益き所縁

御在坐す傳の有けしり其遙社を設けて高神社
カミノニニニ
 二申しけしを將亦其由も知るに成て終よハ五府
 神社を怪し呼奉る事ハ成此のけめども然すが
 天日事振魂命を申す御名の亡せずして傳ひしる
 ハ甚大なる賜物あり不り
其由ハ右四百三十八丁
 己委し注せしハ
 今云限ハ非ずと雖も立返りて考合す可き事共る
 斯也ハ石ノ擧たる文也蓋大己貴命之幸魂奇魂鎮座
 千當山是神代也云迄ハ古語よて此大三輪大物主
 神是也云ハ此よても記者の文あり混同ハ寫へ
 き非然して其大神大物主神社式文の如クハ一座ハ
 して祀るに給へ此とも傳廿九十七上四百二
 十丁ハ注るが
 如く天三輪三社を申して大物主命大己貴命少彦名

命三神めて渡りて給へる中よ少彦名命の御鎮座ハ
 清寧天皇元年よりの御事よして神代より此ハ御在
 坐ハ唯大物主命大己貴命二神のハ有る其大物主
 神の御鎮座ハ次よ云ハ如くして天孫降臨の機ハ臨
 る謂ゆる國降の御時ハ在り大己貴神の御事ハ
 也彼幸魂奇魂神の吾者伊都岐奉于倭之香垣東山上
 と言教さて給へる任ハ其御諸山上ハ其大神ハ神籬
 を建て其齋主ハ御在坐て持齋りせ給ひけしと所
 思ハ己ハ此地を神都として位せ給へりけし其
 ハ傳廿九百八十上三百五十八丁ハ引る神武天皇三

十一年御紀に載りしかる古語に復大己貴大神目之
曰玉牆内國と有を以て其青垣山内御在坐け
る御事を見奉り知べくるむ有けり但大倭神社注進
状に傳聞倭大國魂神者大己貴神之荒魂與和魂裁り
一心經營天下之地建得大造之績と有る如くして其
大己貴神の天下を經營し御在坐ける御時ハ
其和魂大物主神荒魂大國魂神共相並御在坐て
其御功業を助奉りて御在坐けり彼五十狹小
河よて彼幸魂奇魂神の現れ御在坐けり御時ハ出
雲より大和に致し奉りて其御室を營りて齋祠とせ

奉給へる御政の御上よても右の三柱神等相共は係
列して給へる物々未此時ハ大物主神の御靈を
此に鎮め置せさせ給はざりけり其故ハ件の幸魂
奇魂神も出雲にて御形を現りて御問對の御事ハ
御在坐けり今世の状に謗云ふ時ハ其ハ神ハ
ハ大己貴神大物主神大國魂神等ハ顯身の現人神よ
て渡りて給へりハ其神の御祭ハ爲とせ給ふと雖も
己命の祭とせ給ふ御設ハ未御在坐さり當
昔の状とも且ハ思ふ可く有けり此を以て右
よ此大三輪之神也と有る文の允當とせらると思ふ可

くふひ有けり 右の注進状に書せる如くハ大己貴神
の本より其大神の和魂大物主神と荒魂大國魂神と共
の現れさせ給へり趣ありと坐して今新和魂神
とハ別々ありて一は為べり若て此大三輪ハ大物主
神の鎮り御在り坐ける其始ハ出雲神賀詞ハ大八島
國現事顯事令事避支乃大穴持命乃申給久皇御孫命
乃靜坐年大倭國申天己命和魂年八咫鏡取託天倭
大物主櫛懸玉命登名年稱天大御和乃神奈備年坐己
命乃御子河邊須伎高孫根乃命乃御魂年葛木乃鴨能
神奈備年坐事代主命能御魂年宇奈提年坐賀夜奈流
美命乃御魂年飛鳥乃神奈備年坐天皇孫命能近守神

登貢置天八百丹杵築宮亦靜坐之所見たり是あり
鎮座次第ハ腋上池心宮御宇大皇御世神明憑吉足日
命曰吾國造大己貴命也大初己命之和魂取託八咫鏡
名曰倭大物主櫛懸玉命鎮座大三輪神奈備云々有
て古傳と神託と符合へる者あり偕此ハ大己貴神の
己ハ其大造の績を定させ御在り坐ける後ハ天神御
子ハ此國を避奉りせ急上御時ハ己命之和魂大物主
神の御魂を八咫鏡に取託させ御在り坐て更ハ倭大
物主櫛懸玉命と御名を改させ給ひて後來皇御孫尊
の此文和の城内ハ於て大宮所太敷一御在り坐し其

近守神ニて奉置せ給へる由を委曲し聞えさせ御
在ニ坐ケル御事あり其御時の事ありけり大倭神
社注進状も家牒曰腋上池心宮御宇天皇孝元年秋
七月甲寅朔遷都於倭国葛城下卯天皇夢有ニ神人對
曰殿戸自稱大己貴命曰我和魂自神代鎮三諸山而助
神靈之昌運也荒魂服王身在大殿内為寶器之衛護略下
云云事も見えたり大物主神の此御諸山は鎮り御
在ニ坐ス其国避の御時大官敷せ御在ニ坐ベキ
御車を契聞えさせ給いて後の御事ある事著明し斯
とバ右の幸魂奇魂の御上とハ本より別は御在ニ坐

す事申すも更るりけり此の結は此大三輪之神也
と有ハ愈以テ當ルぬ事と曉知づくるひ有ケル但御
傳を仕奉るは其御文を如此論ルいて其僻事あり紀の
を辨ルハ甚有リ事と目覺ルく思ふ人も有ルるの
ども凡テこの古傳は誤有ルハ非ズして其誤ハ唯此大
三輪之神也と云ハ一句は在テ此より諸の惑をも引出
る事ありけり事ハ於テ止事を得ざる者あり右件
凡テの委シ事ハ御紀ニ超たる事なきを中ニ古事
記の方殊ニ正シと思ゆル大三輪の舊号三諸山ハ
事有ルハ相合せて云フり事右四百五十一丁注ル如ク偕其三輪ハ三三祭ニ神
酒ハの二義有ケル其三祭の由来ハ下四百六十一丁注ス
可クりけり此ハ此ハ先其神酒の義を説へきあり柳柳
神酒ハ云言ハハ崇神天皇八年御紀ハ以高橋邑人

活日為大神之掌酒掌酒此云冬十二月丙申朔乙卯天
皇以大田之根子令祭大神是曰活日自舉神酒獻之曰
許能游枳破和識游枳那羅孺傳倭柳磨等那殊於明望能農
之能釀分游之游枳伊句臂佐伊句臂佐如此歌之實于神
官郎宴竟之諸大天等歌之曰宇磨佐門游和能等能
阿佐妬珥毛伊弟氏由今那游和能等能渡鳩於是天皇
歌之曰宇磨佐門游和能等能阿佐妬珥毛於辭寐羅
箇祿游和能等能渡鳥即閉神宮門而幸行之下有
此意を説て其義を得べき者あり右の歌も許能游
枳破和識游枳那羅孺ハ此神酒者不我神酒云事ハ

於明望能農之能

て神功皇后十三年御紀壽館の大御歌にも有り柳磨
等那殊ハ倭成大物主倭大物主櫛鹿玉命と申奉る倭同
く其國を經營し給へる御事を申せらるる介游
之游枳ハ為釀神酒カシよて此ハ上古ハ此神の此處よて
酒を釀し給ひて其幸魂奇魂神を齋奉り給へり
御事よ因て此ハ神酒云地名ハ起ゆるよこりハ有
けぬ上古ハ其神の此ハ神酒を釀し給へりハ故事の
有を立て今任奉る神酒ハ我が釀成す所と雖も實ハ
ハ其大神の助今成給へる物と壽祿へ申せらるる
けり其神功皇后の大御歌ハ虛能弥企破和識游此神酒八正耶

羅標區之能加弥等虛豫耳伊麻輪伊破多之須周玖耶
神 弥加未能等豫保枳保枳茂若 陪之訶武保枳保枳
神 流保之摩莢利虛綺弥企層阿佐彌鳩斎佐と有ハ古
 事記ありと少ク異ある所有と雖も是も其神酒を少
 彦名神の御上と託たる者ゆゑ其意味相等しきハ
 大己貴神大物主神少彦名神共ハ各酒を釀し始させ
 給へる神等御上坐せハなり傳十九酒の事廿三百
丁廿六百五十ト云々共を合せ見る可きあり如此
 行ふ事を其事を始物爲給へる神は係て我功ニ成り
 ろハ我上古の況よて其例高橋氏文景行天皇安房
 浮島官御上坐けり時ハ供御の物共を仕奉る
 時の文御命ハ此者警鹿六獨命獨我心彼非矣斯天

坐神乃行賜倍留物也云々詔給ひて開食させ給ひ
 又其事ハ仕奉りハ船鹿六獨命ハ是時上総国安房
 大神子御食都神止坐奉天若陽生連等始祖意昌賣布
 連之子豊日連子令大鑽天此子忌火止爲天伊波比由
 麻問天供御食云々有て其仕奉る車を御食都神ハ
 代て物爲く心用よて君臣共ハ物車ハ自功ハ誇
 くざり古の風儀よて故右の二歌共ハ宇磨佐閑添和
 甚く愛き御車ハ多し
 能等能と有ハ味酒三輪之殿之續けり水たるよて
 味酒ハ謂ゆる發語ある者あり万葉一十三ト味酒三
 輪乃山四四十ト味酒呼三輪之祝我忌杉手觸之罪歟
八ト味酒三輪乃祝之山照秋乃黄葉ると有と同
 ト續け状あり三輪の事ハ次ハ云べト又七十六ト味酒
 三室山十一十四ト味酒之三毛侶乃山尔と有ト三輪

續けたるト十三 味酒乎神名大山火之
 有ト十三 味飯乎水亦釀成と有ト十三 同ト味酒
 を釀し事を神名火山係たり一者あり猶其味酒と云
 事ハ猶常陸凡士記ト久慈之味酒ト見えたるハ其地
 名立ト十三 謂ある可一倭姫命世記ト味酒鈴鹿国ト有
 通證ト今世酒餅称須彌此義也注されたるハ如
 然れハ味酒より兼て三輪トも三室トも神名火山ト
 也鈴鹿トも續らる定格ト見えたり私記ト宇磨佐間
 甘美酒也言言旨酒也注されたり和名抄酒醴類ト
 禮四聲字苑云禮和名古 一日一宿酒也ト有是ト
佐介

今世詩ト旨酒ト思
 と有る旨酒ト河邊
 依神ト割るハ味
 酒ト高左ト有
 酒ト高左ト有
 右の味酒鈴鹿國
 酒ト高左ト有

世ト云ふ甘酒アマザケの事あり右の如く一晝夜ト成
 物あり故ト又ハ一夜酒ト云ふト又通證ト三
 代實録曰木兔宿禰之後賜味酒臣姓禰宗傳曰臣誓文
 雄之父祖為奈酒正事三輪神故以味酒為氏ト所見
 たり右の味酒乎神名火山ト續けたる釀の言ハ己ト
 傳ト十三 注るハ彼味飯乎水亦釀成ト有ハ如く
 精米の味飯を搗カヒ立して水ト和ト酒ト為る謂めて冠
 辞考味酒條頭書ト酒を釀するてト語ハ麴カヒを交へて
 造る事あり其加益ト知ハ牙カヒ立して米の穢カヒの立たる
 と云り故ト加美須流加毛須流加牟と云ハ皆言通

へりといふに言傳よも然らむ然ら言るあり此小就て上五百六十

注せら播磨凡土記よ完未郡庭音村本名大神御粮枯

而生稻即令釀酒次献庭酒而宴之故曰庭酒村今人云

庭音村と有る此文よ御粮よ生稻カサナ令釀酒と有ると以て

右の二大入の説を証すよ足りゆと云へくあむ但塵

囊物よ大隅凡土記云大隅国よ一一家水こまを設

けて村よ告巡くせバ男女一所よ集りて米を鑿て酒

船よ吐入て散りよ飯りぬ酒の香出来り時又集りて

鑿て吐入し者共是を吞て口釀の酒と云と云と有

ハ田舎よ稀よ在し事あり故右の神酒を美和美和と美

伎とも訓るよ舒明天皇四年御紀あり神酒も美和和語云

ろ小和名抄祭祀具よ神酒日本紀私記云神酒美和

と所見たり偕目ト神酒の字を然こ訓る美伎ハ御

酒よ其物を云ひ美和ハ御庭よ其器を云ふ即其

物名よも通ゞ云事あり水を美此比と云る此

ハ碗めて本器物の称あり御水ミゼ又主水ミヅトリあり書て水

名よ為るよ等一り可一其器物あり證ハ可葉二三

六よ哭澤之神社尔三輪須息雖積十三四よ五十串立

神酒座奉るど有を冠辞考よ三輪ハ假字よて酒を釀

たる醜の事あり故よ居スレて云り集中よ忌戸字斎穿居

と有と同一供神の酒ハ齋醜ハ釀て其醜あり供る故よ三輪須息と云る言あり但美

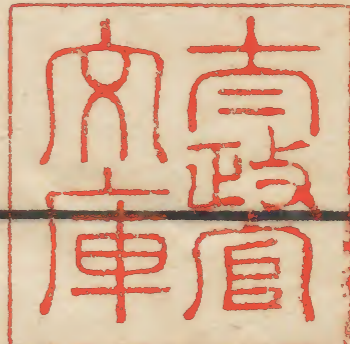
和ハ釀醜を略きて云るありと云とたる説ハ従ハ難一

又出雲神賀詞天能應和午齋許母利氏とを語有を
同考供神の御酒を醸たる應と云りと云は祝詞考
りも天ハ美ら言應ハ酒を醸る器ありと云は注水た
るよ本著て鈴屋大人の後釋は應和と云も唯應めて
和よ別は意有は非ず三輪の輪と同ト然ハハ三輪と
云も即應和の略めても有べし今世も一斗計入る大
鍋を斗那和と云ふ其和も同ト聞ゆとハ和ハ應又
大鍋ふどの器の惣名あり可一取と云ハたる其三輪
と應和とを一子為る水たるハ甘あり難き事ありと
も和ハ應又大鍋ふどの器の惣名と見くはたるハ珍

るしき説めて和ハ輪をも丸をも訓じ事ありとハ應鍋
ふどの底有る物あり必通ハ一て云べき理あり者ふ
り然とども醸應も應和も共は美和とハ約する可き
事よハ非ハハ御應と心得て足らざる右の天能應
字よして別意有べく思ゆ其事ハ別は祝詞講義を著
述してこよ委しく注せよハ此よ云べき限は非ず
故其美和ハ御應ありと云ハ此より伊和より宇和と
も轉じるを以て知くはたり上件の如く醸應應和よ
てハ如何しても然轉るふ可き由あり無うけ其伊
和ハ上百七十ノ注せ播磨凡土記完末郡伊和村
本名大神醸酒此村故云神酒村又云伊和村大神国作
神酒

訖以後云於和等於我美岐之有る此大神ハ即大己貴
大神を申せらるり釀酒此村ハ大己貴神此ハ酒を釀
給へりしめて此外あり右引る庭音村の文ハ大
神御稔拈^拈而生稻即令釀酒之有ハ更らり猶賀茂郡下
鴨里有碓居谷箕谷酒屋谷此大汝命造碓稻舂之處者
号碓居谷箕置之處者号箕谷造酒屋之處者号酒屋谷
之有て大神の御酒を釀給へり地彼此見えたり故
云神酒村ハ此ハ就て美和村と云とよて右ハ注る大
和国の三輪之名義相等しき事あり偕又云於伊和村
大神国作訖以後云於和ハ於保美和の略あり

ハ其即我神酒と云と同一義なり然るを其於和
を再轉して伊和と云ありむが伊和ハ齋^{イハヒ}と云義ハ
取て彼齋戸と云と同一意ありむ然るハ此地名を
伊和と云ハ於和の轉とも爲へけむ神名をハ伊
和大神と稱奉り其后神を伊和都比賣神と稱奉り
ハ然訖^{イハヒ}ハ諸を以て号け申べき由無ハあり但伊
和を齋^{イハヒ}と見ても右件あり知る美和の美ハ釀の義
無くして和ハ應の義有と知らし足^{二百}又上^十
ハ引る土佐凡土記ハ神河訓三輪川源出北山之中屆
于伊與国水清故爲大神釀酒也用此河水故爲河名也



有る此大神ハ神名式ニ謂ゆる賀茂神社の御事か
 るが其大神の神酒を供奉す由を以て三輪川の名ハ
 出来たり然して和名抄郷名ハ同郡宇和ニ有
 り其属于伊與國ハ其隣境伊豫國宇和郡宇和郷あり
 三代實録ハ宇和津彦神と申す神名の出たるハ其地
 ハ御在坐す大三輪大神の御名よりて右の伊和太
 神と同一義あり者あり然る時ハ宇和ハ右の伊和と
 同言ありて於和とも相通ふ事本よりあるが何れも
 禰^ミ麩^コより麩^ミ和^カよりも来たり非ずして三輪ハ御麩^ミ
 伊和宇和ハ齋^イ麩^ムにて於和ハ於保美和の略り又ハ大^{オホ}

